

バス車内における情報提供が住民の利用意識と地域交流意識に与える影響

高知工科大学 1220159 宮本 あきの
指導教員 西内 裕晶

1. 背景と目的

近年、日本の地方部ではモータリゼーションの進展により、バス路線の短縮や廃止が目立っている¹⁾。その対策として、地方自治体では公共交通空白地域の住民の交通支援を主な目的としたコミュニティバス等の地域公共交通の導入により地域内の交通手段の確保に努めているが、利用者数は増加していない現状である。そのため、利用者の増加を促す様々な利用促進策が検討されている²⁾。

そこで本研究では、地域公共交通の車内において地域交流を促進させることを狙いとした情報提供を行うことにより、住民のバスに対する利用意識の変化と地域交流意識の向上効果を明らかにすることを目的とする。

2. 研究概要

本研究では、高知県梶原町で実証運行中のコミュニティバスを対象にヒアリング調査を実施し、梶原町民の情報提供によるバスの利用意識の変化と情報提供の取組みを周囲に伝える意識を把握する。なお、本調査では、回答者にバスに乗車していると仮定して頂き、調査の協力を依頼した。調査後、ヒアリング調査で得られたデータを用いて AISAS モデル³⁾に基づく共分散構造分析⁴⁾により回答者の意識を分析する。AISAS モデルとは、インターネット普及後におけるユーザーの購買行動モデルであり、マーケティング理論の一つとして利用されている。本研究では、情報提供によるバス利用者の意識の流れが AISAS モデルに従うものと仮定した。AISAS モデルを適用したバス利用者の意識の流れを図 1 に示す。なお、本研究では、提供する情報の内容を昔の地域写真とした。本調査の詳細について表 1 に示す。また、本調査の質問項目について表 2 に示す。

3. ヒアリング調査の結果

本調査の結果より、バスを普段から利用している人が回答者の 10% であるのに対し、動画を見て次もバスに乗車したいと思う人は 26%、動画があることでバスの乗車回数が増えると回答した人が 30% であった。このことから、動画によりバスの利用意識が変化する可能性を示した。また、

表 1 ヒアリング調査の詳細

項目	内容
対象者	梶原町の住民
調査場所	コミュニティバス車内（四万川地区） スーパー丸味、梶原病院、四万川診療所 梶原町立図書館、西の川集会所
調査日時	2021年11月1日～2021年11月5日
調査方法	ヒアリング調査
回答数	70
有効回答数	61

表 2 ヒアリング調査の質問項目一覧

1.個人属性について	(1)性別 (2)年齢
2.バスの利用意向について	(1)バスを普段から利用しているか (2)バスを使って通院先まで行きたいか (3)バスを使って買い物先まで行きたいか (4)これからバスを利用していきたいか
3.利用満足度について	(1)バス車内で会話は弾むと思うか (2)動画があると次もバスに乗車したいと思うか
4.話題提供の効果について	(1)動画の内容に満足しているか (2)動画を見て会話回数は増えると思うか (3)動画を見てバスの乗車回数は増えると思うか (4)動画の内容に興味があるか
5.地域交流について	(1)この取り組みを家族に伝えたいか (2)この取り組みを親戚に伝えたいか (3)この取り組みを近所の人に伝えたいか (4)この取り組みを地域の子どもたちに伝えたいか (5)この取り組みをその他日常的に会話する人に伝えたいか (6)(5)で伝えたい人とはどこで知ったか (7)地域の方と会話することは好きか
6.話題提供の内容について	(1)動画の写真の中にお気に入りの写真はあったか (2)これからお気に入りの写真を探していきたいと思うか (3)これからお気に入りの写真を増やしていきたいと思うか (4)どのような写真があると嬉しいか
7.感想や意見	自由欄

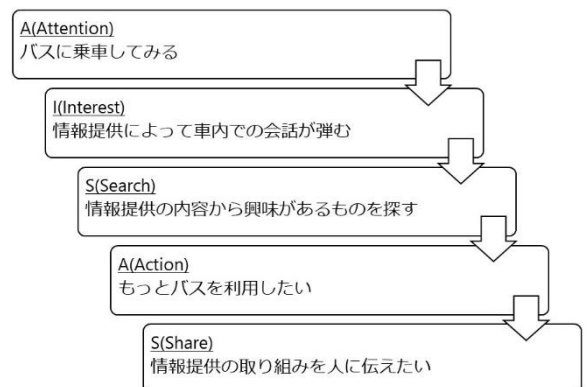


図 1 情報提供によるバス利用者の意識の流れ

キーワード 地域公共交通、情報提供、利用意識、地域交流意識、共分散構造分析

連絡先 〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185 高知工科大学 都市・交通計画研究室

卒業論文概要

情報提供の取組みを家族や親戚、近所の人に伝えたい人はそれぞれ70%以上であるのに対し、地域の子どもたちに伝えたい人は34%であった。

4. 共分散構造分析

本研究では、情報提供が利用意識や地域交流意識に及ぼす影響構造を把握するため、IBM SPSS Amos 28 Graphics を使用し、AISAS モデルを適用した共分散構造モデルを構築する。共分散構造分析とは、分析者が質問項目間の因果関係について仮説を立て、複数の構成概念間の関係を検証する統計的手法である。分析の結果、最もモデル適合度が高かった共分散構造モデルを図2に示す。ここで、構築した共分散構造モデルの適合度は0.742であった。この結果は、適合度が良好とされる基準の0.9と比較すると低いものとなった。この原因として、標本数が61と少なかったこと、標本数に対するモデル構築に使用した変数が多かったことが考えられる。

図2の分析結果より、「バスを普段から利用している」は0.170であるのに対し、「動画を見てバスの乗車回数は増える」は0.989であった。このことから、バス車内での情報提供がバスの利用促進につながる可能性を示唆した。また、情報提供の取組みがバスの利用意識に変化をもたらすと推測された。加えて、情報提供の取組みを人に伝えたい意識がそれぞれ0.9以上と高いことから、動画が会話のきっかけとして地域での会話の促進につながり、情報提供を体験していない非体験者を含むバス乗車を通じた地域交流促進に結びつくような波及的効果を有する可能性を示した。

5. まとめと今後の課題

本研究では、共分散構造モデルを構築することにより、バスの車内において情報を提供することで、住民のバスに対する利用意識の変化と地域交流意識の向上効果について把握した。バスの利用意識の変化の把握では、情報提供がバスの利用意識に変化をもたらしたと言える。また、情報提供がバスの利用促進策になり得ることを示唆した。地域交流意識の向上効果については、情報提供が会話のきっかけとなり、会話促進につながる事が明らかになった。また、非体験者への地域交流促進に結びつくような波及的効果の可能性を示した。しかし、地域の子どもたちへの波及的効果については確認できなかった。

今後の課題としてまず、情報提供の内容として風景や景色、季節行事といった四季を感じられるものに興味を示すことが明らかになったため、前述の写真も組み入れるとともにサンプル数を増やす必要がある。また、住民が地域の子どもたちと日常で定期的に交流があると仮定して調査票を作成したが、子どもと話す機会があまりないという回答が多く、子どもも参加しやすい情報提供のあり方を検討する必要がある。加えて、どのような情報提供であれば高齢者だけでなく、全世代の人にバスを移動手段の選択肢の一つとして認知して頂けるかを検討する必要がある。

参考文献

- 1) 国土交通省：高齢者の移動手段の確保に向けた最近の動きについて
- 2) 谷口綾子、藤井聡：公共交通利用促進のためのモビリティ・マネジメントの効果分析，土木学会論文集 D3, 第62巻, 1号, pp.87-95, 2006
- 3) AISAS モデルの特徴と実際の成功事例3選, <https://collatech.co.jp/ifm-lab/uncategorized/7154>
- 4) 狩野裕：共分散構造分析の基礎と実際-基礎編-, https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/seminar2002_1.pdf

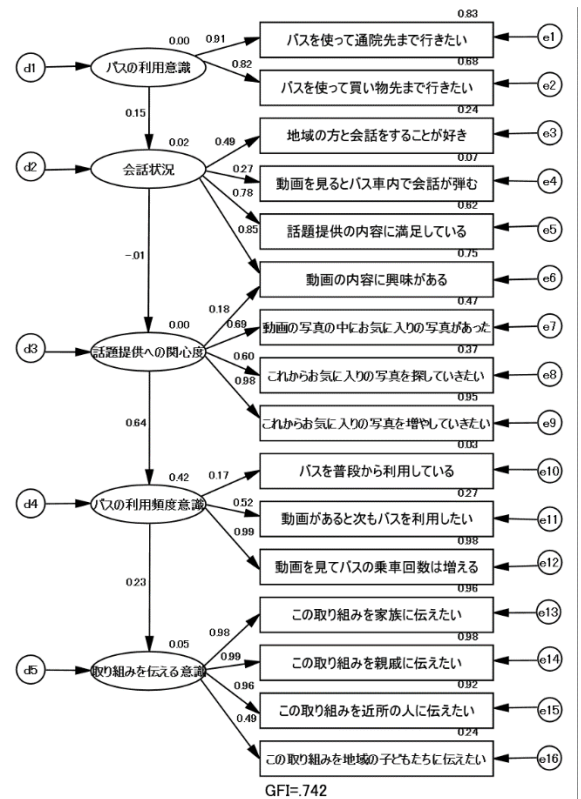


図2 共分散構造モデル